

# 第7章

## 固定資産

～学習内容～

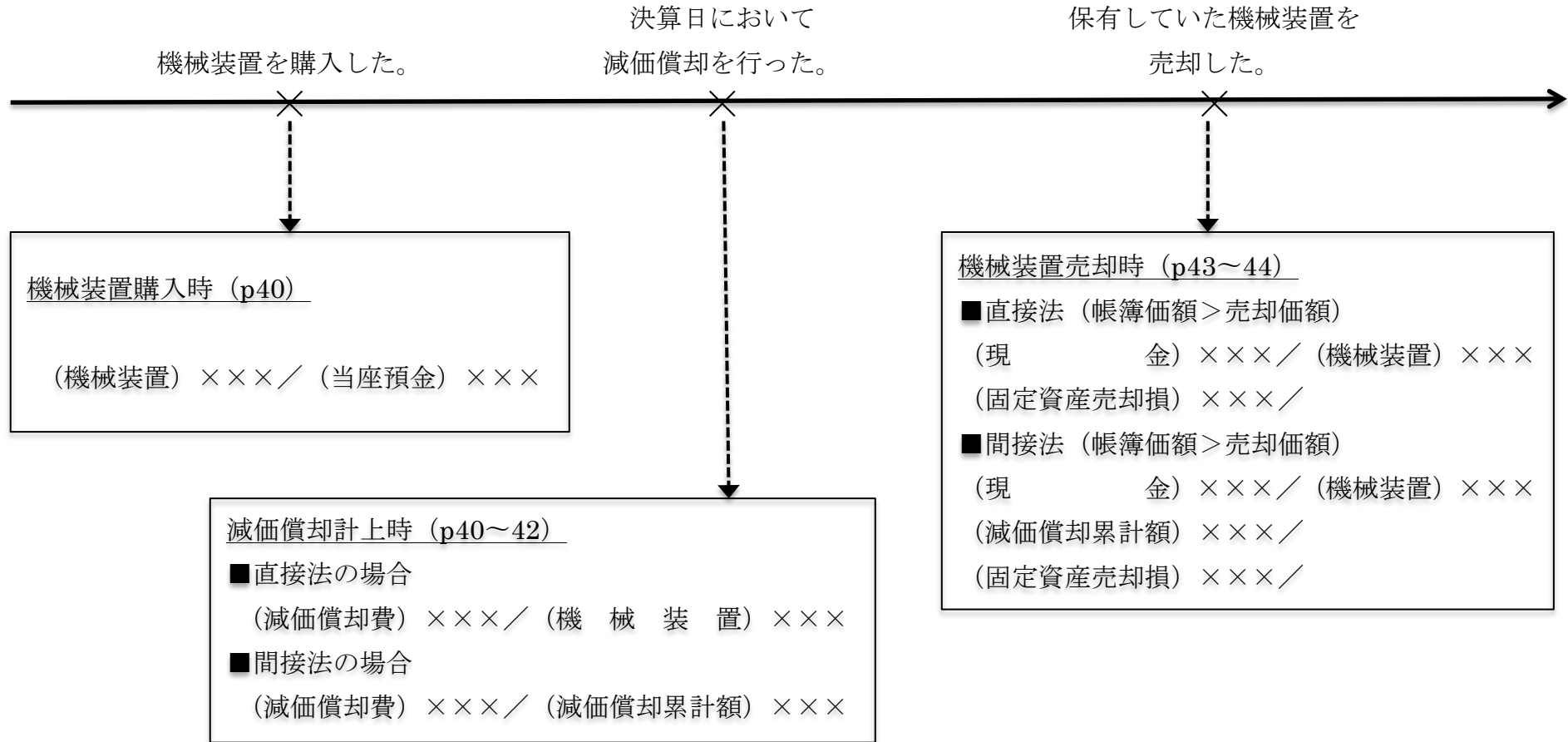
- ・ 購入と売却
- ・ 減価償却

お店の建物や車などなど  
固定資産は色々あるよ



# 第7章 固定資産

## 1. 取引の流れ



## 2. 固定資産購入時

固定資産とは、土地・倉庫・棚・トラックなど、長期間使用することができる資産をいいます。

固定資産を購入した場合には、『土地』・『建物』・『備品』・『車両運搬具』など、それぞれの固定資産を示す具体的な勘定科目を用いて処理します。なお、購入にかかった価額を「取得原価」といい、固定資産それ自体の価額（購入代価）のみならず、購入手数料など購入するためにかかった費用である付随費用も含めて計算します。

### 【例7-1】

商品陳列用の棚を5,000円で購入し、代金は運送費500円とともに小切手を振り出して支払った。

勘定科目	金額	勘定科目	金額
備品	5,500	当座預金	5,500

## 3. 減価償却計上時

### (1) 減価償却とは

建物や備品など、土地以外の固定資産は使用すれば劣化などにより価値が低下（「減価」）するため、「減価償却」という手続きが必要となります。

減価償却は、この減少した価値部分を当期の収益と対応させるために費用に計上する手続きであり、具体的には、資産に計上されている固定資産の帳簿価額の一部を『減価償却費』（費用）として処理します。

### (2) 減価償却の計算方法

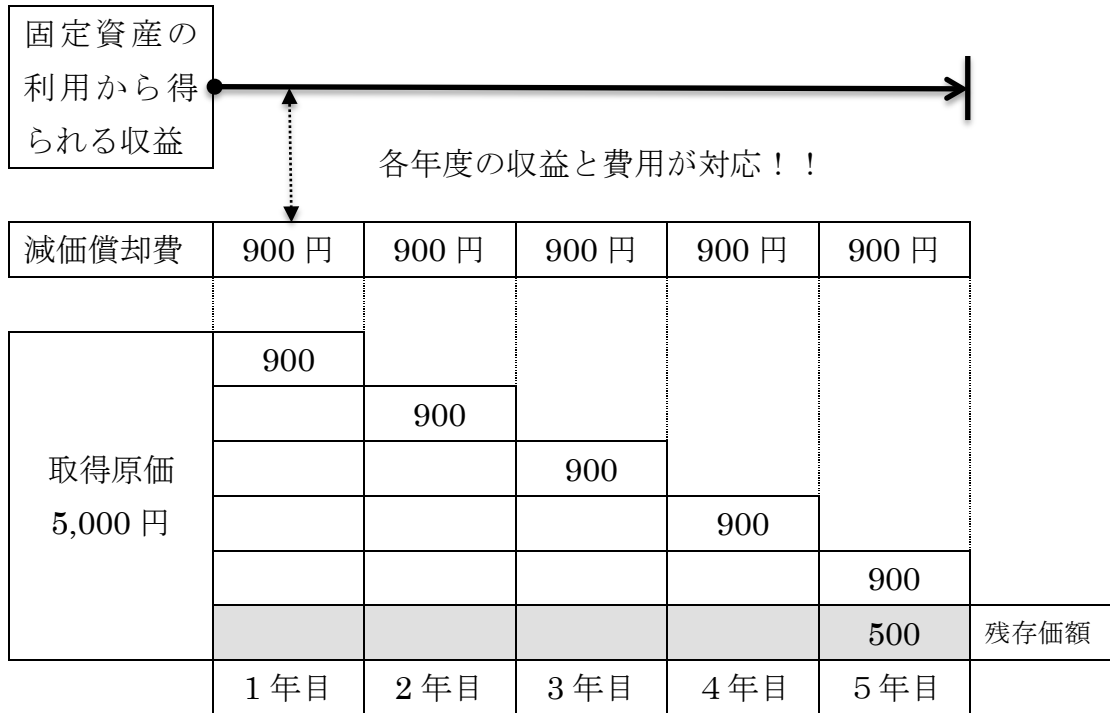
減価償却費の計算にはいくつかの方法がありますが、3級では「定額法」を学習します。

定額法とは、固定資産の価値の減少が每期一定と考え、減価償却費を計算する方法です。具体的には、取得原価から残存価額<sup>※1</sup>を控除した要償却額を耐用年数<sup>※2</sup>で除して計算します。なお、期中に取得した場合には月割計算を行います。

※1：残存価額とは、耐用年数経過時の固定資産の処分価値（残存する価値）のことです。

※2：耐用年数とは、固定資産を利用することができる年数のことです。

例えば、取得原価 5,000 円、残存価額 10%、耐用年数 5 年の備品を期首に購入した場合、各年の減価償却費は以下のように計算されます。このように各年度に減価償却費（費用）を計上することで、固定資産の利用から得られる各年度の収益と適切に対応づけることができます。



各年度の減価償却費の計算

$$\frac{\text{取得原価} - \text{残存価額}}{\text{耐用年数}} = \text{減価償却費}$$

$$(5,000 \text{ 円} - 500 \text{ 円}^*) \div 5 \text{ 年} = 900 \text{ 円}$$

$$^* 5,000 \text{ 円} \times 10\% = 500 \text{ 円}$$



### (3) 減価償却の記帳方法

減価償却の記帳方法（仕訳の方法）には、「**直接法**」と「**間接法**」の2つがあります。

#### ①直接法

直接法は、借方に『減価償却費』（費用）を計上するとともに、同額だけ固定資産の帳簿価額を減額、すなわち貸方にその固定資産の勘定科目（例えば倉庫なら『建物』勘定）を記入する方法です。

#### 【例7-2】

決算において、建物にかかる減価償却費 500 円を計上した。なお、直接法により記帳すること。

勘定科目	金額	勘定科目	金額
減 価 償 却 費	500	建 物	500

#### ②間接法

間接法は、借方に『減価償却費』（費用）を計上するとともに、同額だけ貸方に『減価償却累計額』を計上する方法です。

なお、減価償却累計額は、建物であれば『建物減価償却累計額』、備品であれば『備品減価償却累計額』とすることもあります。

#### 【例7-3】

決算において、建物にかかる減価償却費 500 円を計上した。なお、間接法により記帳すること。

勘定科目	金額	勘定科目	金額
減 価 償 却 費	500	建物減価償却累計額	500

## 4. 固定資産売却時

固定資産の売却時の処理は、記帳方法として直接法・間接法のいずれを採用しているかで異なります。

### (1) 直接法で記帳している場合

固定資産を売却した場合、固定資産がなくなるので、固定資産を帳簿から削除しなければなりません。

直接法の場合、減価償却を行った段階で、固定資産の取得原価が直接減額されているため、固定資産の帳簿価額を貸方に記入し、売却価額との差額を『固定資産売却損』または『固定資産売却益』として処理します。

#### 【例7-4】

当期首において、購入より3年が経過した車両（取得原価10,000円、残存価額10%、耐用年数10年）を7,000円で売却し、代金は現金で受取った。なお、減価償却の記帳方法として直接法を採用している。

勘定科目	金額	勘定科目	金額
現金	7,000	車両運搬具	7,300
固定資産売却損	300	-	-

#### 解説

車両は購入から3年が経過しているので、売却時点では3年分の減価償却費2,700円<sup>\*</sup>を計上していることとなります。本問では直接法が採用されているため、売却時点の帳簿には『車両運搬具』7,300円（=10,000円-2,700円）が計上されています。

※ {10,000円 - (10,000円 × 10%)} × 3年 / 10年 = 2,700円

#### 貸借対照表

:		:
車両運搬具	7,300	(省略)
:		:

(2) 間接法で記帳している場合

前述したように固定資産を売却した場合、固定資産がなくなるので、固定資産を帳簿から削除しなければなりません。

間接法の場合、固定資産の取得原価はそのまま計上されていますが、減価償却を行った段階で、減価償却費の額だけ『減価償却累計額』が計上されていますのでこれらを取り崩す処理を行います。そして、取り崩した金額の純額（これが帳簿価額となります）と売却金額の差額を『固定資産売却損』または『固定資産売却益』として処理します。

【例7-5】

当期首において、購入より3年が経過した車両（取得原価10,000円、残存価額10%、耐用年数10年）を7,000円で売却し、代金は現金で受取った。なお、減価償却の記帳方法として間接法を採用している。

勘定科目	金額	勘定科目	金額
現金	7,000	車両運搬具	10,000
車両運搬具減価償却累計額	2,700	-	-
固定資産売却損	300	-	-

解説

車両は購入から3年が経過しているため、売却時点では3年分の減価償却費2,700円\*を計上していることとなります。本問では、間接法が採用されているため、帳簿には『車両運搬具』10,000円と『車両運搬具減価償却累計額』2,700円が計上されています。

※ {10,000円 - (10,000円 × 10%)} × 3年 / 10年 = 2,700円

貸借対照表

：		：	
車両運搬具	10,000	車両運搬具減価償却累計額	2,700
：		：	